

優秀賞

教室の中で見つけたもの

西巣鴨中学校 坂下 尚也

明るく、平和で平等な社会とは何だと思いますか。一般的には「差別のない世界」や、「戦争のない世界」と言われていますが、現実の社会でそれを実現するのは簡単ではないと思います。だけど、僕は一年前の転校をきっかけに、その理想に近づくためのヒントは、僕たちの日常のごく身近なところに隠されているのではないかと考えました。僕が今住んでいる区には、様々な背景を持つ人たちが住んでいます。

一年前、今の学校に転校してきたとき、僕は以前の学校とのギャップに大きな衝撃を受けました。教室には日本人の生徒だけでなく、様々な国籍や背景を持つ仲間が当たり前のようにクラスの中にいるからです。しかも、学習を行うことが少し難しい人のための特別なクラスもあるのですが、会話ができない人が同じ教室で、同じ生徒として日々を過ごしていました。当初、僕はかなり戸惑いました。正直なところ、「言葉が通じない相手とはコミュニケーションが難しいし、無理に関わらず、少し距離を置いて過ごすのがお互いのためではないか」とさえ思っていました。だけど、時間が経つにつれ、僕の想像とは異なる光景が目に見えてきました。クラスメイトたちは、言葉が分からず困っている仲間に対し、誰に指示されるのでもなく、自主的に助け合い、身振り手振りやタブレットを使い活動を行っていました。その光景を見て、僕は自分自身を深く恥じました。「言葉が通じないから」と一方的な理由をつけ、無意識のうちに相手を避け、心の中で「自分たち」と「彼ら」という線を引き、自然と距離を取っていました。これは、いわゆる「差別」に他ならないものだとは当時も考えもしませんでした。自分にとっての当たり前や常識が、実は偏見に満ちた独りよがりなものであったことに気づかされた瞬間でもありました。この気づきは、単に外国人と日本人という関係だけにとどまらないと思っています。

僕たちの周りには、目に見える違いだけでなく、目に見えにくい何かを抱えているはずです。例えば、学習面で手助けやサポートが必要な人、体に不自由がある人、あるいは家庭環境や精神的な悩みを抱えている人など、多種多様な違いが存在していると思っています。僕はこれまで、自分と違う人に対して「どう接していいかわからない」と消極的になったり、勝手な先入観で接し方を決めつけたりしていました。自分自身の常識という物差しで他人を測ることは、相手の個性を否定して疎外感を生む原因になってしまうし、多様な人々が生きている社会において、まず必要なのは自分の常識を疑うことであり、相手の立場に立ってその背景を想像する、想像力なのだと考えています。

平等とは、単に全員を同じように扱うことではなく、一人ひとりが抱える事情を理解し、それぞれが必要としている助けを自然に差し伸べ合える関係性こそが、真の平等への第一歩だと思っています。僕が今の学校で見つけた「助け合い」の光景は、まさにその芽生えであったと感じていて、僕たちはつい国による解決といった大きな動きに期待してしまいがちです。もちろんそれも重要だけど、それ以上に大切なのは、私たちの心の在り方であるのかなと思いました。自分の中にある無意識の偏見に気づき、小さな心の壁を取り払っていくこと。そして、目の前の仲間に進み寄り、共に手を取り合うこと。こうした小さな改善が積み重なって、やがて社会全体を包むくらい大きくなったとき、僕たちは本当の意味で明るく、平等で平和な社会を作ることができたと言えるのではないのでしょうか。

僕は、教室という小さな場所で学んだこの事実を胸に、多様性を認め合い、誰もが自分らしくいられる

未来を築くために努力を続けていこうと思います。